

奔放で淫らな人妻 ～智子の童貞喰い～

直輝／NAOKI

1.

「おはようございます」

「啓太くん、いってらっしゃい」

啓太は、きょうも隣の人妻にあいさつしながら、学校へ出かけた。

人妻は、朝早く夫を送り出したあと、いつもこの時間に洗濯物を庭に干している。

彼女の名前は、山崎智子。

夫と結婚して、啓太の家の隣に引っ越してきてから、もうすぐ一年になる。

最初に、夫婦揃って啓太の家に挨拶に来たとき、啓太は高校生になったばかりだった。

(きれいな奥さんだな。胸も大きいし)

あのメロンのような大きな胸に視線が吸い寄せられたこと、その夜、あの人妻の裸体を妄想して自慰に耽ったことは今でも覚えている。

ふたりには、今でも子どもがないためか、智子は啓太のことを、「啓太くん」と言ってかわいがった。そして、その当時からお菓子をくれたり、啓太が自分の庭で涼んでいると、隣から顔を

出して、「啓太くん、何してるの？」とよく声をかけた。

まだ女友達のいなかった啓太には、彼女の愛らしい笑顔が天使のようだった。

毎日オナニーに耽っていた性欲旺盛な高校生は、いつも彼女を想像しては、溜まった欲望を吐き出していた。

(奥さんも、あの時、えっちな声を出すんだろうか)

啓太は自分のベッドでオナニーしながら、そんなことばかり考えているのだった。

智子を見るたびに、

(一度でいいから、あの奥さんを抱いてみたい)

そんな思いは、どんどん強くなっていった。

庭にいるときの智子は、T シャツにミニスカートというラフな格好が多く、智子のその明るい笑顔とともに、大きく盛り上がった T シャツの胸の部分と、スカートからきれいに伸びるむっちりした白くふくよかな太ももが、そんな啓太の想いをますます強固なものにしていた。

(なんとか、チャンスはないだろうか.....)

そんなことばかり思っていた。

そんなある日の土曜日の昼少し前。啓太の両親は、遠くの親戚の法事に参列するため、朝早くから出かけていて、啓太はひとりで家にいた。

何もすることのない啓太は、二階の自分の部屋から、ぼんやりと外を見ていた。

隣の庭先では、ホースの水を撒き散らしながら、智子が、真っ赤な車を洗っているのが見えた。

ミニスカートから白い太ももが覗き、腰を曲げるとむっちりしたヒップが強調されて、啓太は注視しながらいつもの妄想とともに、股間をふくらませていた。

「啓太くん、ひとりなんでしょう？」

ふいに、彼女がこちらを向いて、声をかけてきた。

「そうですけど……」

啓太は窓を開けながら答えた。

「今朝、ご両親が、法事に出るから啓太をよろしくって言ってらしたから」

「はい……」

「私もきょうはひとりよ」

「旦那さん、お休みじゃないんですか？」

「客先でトラブルがあったって、朝早く出張したわ」

「そうですか……」

(チャンス！)

啓太は思ったが、彼女を誘う口実が見当たらなかった。

「もうすぐ終わるから、うちでお昼食べない？」

「いいんですか？」

「ひとりで食事じゃ、おたがい寂しいでしょう？」

「そうですね」

「十二時になったら、うちに来てね」

「はい。ありがとうございます」

「じゃあ……」

そう言って彼女は、またホースから水を出していた。

いつも声をかけてもらってはいたが、彼女の家に入ったことは、かつてなかった。

十二時まで、あと一時間ちょっとだった。

(絶好のチャンスだ。強引にえっちしてしまおうか)

啓太は思ったが、そんなことは適わぬ妄想だった。それに、さすがに強姦はまずいと思った。

けれども、あの智子とふたりきりで家で食事。

それも、智子の手料理。啓太の胸の高鳴りは、収まることはなかった。

我慢できなくなった啓太は、ベッドに寝転んで、堅くなったペニスをシゴいた。

(あああ……智子さん……)

いやがる智子をむりやり押さえつけ、服を引きちぎる。

(いやあ！)

智子の柔らかそうな豊かな胸、むっちりした太もも、

まるやかなヒップを思い浮かべて、夢中になっていた。

(啓太くん、だめよ、だめよ.....)

(智子さん.....気持ちいいよ)

智子の濡れそぼった女陰むりやり突っ込んで、腰を振る。

(あああ.....智子さん、出る！)

ドクドクドクドク.....。

ティッシュに、ザーメンがぶちまけられていた。

十二時ちょっと前。

啓太は、隣の家のチャイムを押していた。

「はあ〜い♪」

少し艶っぽい声がして、ドアが開けられた。

「おじゃまします」

「何かしこまってるのよ。早くあがって」

「失礼します」

啓太はスニーカーをきちんと揃えて、玄関をあがった。

「ほんとにいいんですか？」

「言ったでしょう？ ひとりじゃつまらないし.....」

「はい.....」

「こっちよ」

木製のテーブルに白いクロスが掛けられ、その上に、いくつもの料理が並んでいた。

「お口に合うといいんだけど……」

「……」

「食事はまず目で見て味わう……よね」

「はい……すごくおいしそうです」

「ここに座って」

智子は啓太に椅子を勧めると、テーブルの向かい側に腰を下ろした。

ミートスパゲッティにハンバーグ、テンプラ、野菜サラダ、デザート……。

どれも、ほんとうにおいしそうだった。

智子は、ご飯と味噌汁をつけてくれた。

「いただきます」

「遠慮しないで、いっぱい食べてね」

「はい……」

見た目通り、どれも美味しい料理だった。

「旦那さんは幸せですね」

「はい？」

「いつもこんなおいしい料理を食べられて……」

「いつもはもう少し手抜きかな」

そう言って、智子はケラケラと笑った。

それから、啓太に学校のことをいろいろと質問してきた。

啓太が話すたびに、智子はケラケラ笑って、おいしい食事ともども楽しい昼食だった。それ以上に、タンクトップの豊かな胸のふくらみ、スカートから覗く柔らかそうな太ももが目についていた。

「啓太くん、大きくなったわよね」

「身体だけは……」

「私がおここに来たときは、中学生だったわよね」

「はい……」

「まだまだ子供だったのに、立派になったわね」

「いえ……そんなことはないです」

「でも、真面目そうなところはぜんぜん変わってないわ」

「真面目そう？」

「ごめん……真面目だった」

そう言って、またケラケラと笑っている。

「啓太くんは、もう彼女いるんでしょう？」

「いえ……」

「うそ」

「ほんとにいません」

「こんないい男に迫らないなんて、今の女の子には見る目ないのね」

「そんな……」

「カッコいいし、素直で礼儀正しいし、真面目だし……」

「そんなことはありません」

「なによ。もっと自分に自信持たなくっちゃ」

「そうでしょうか？」

「啓太くんは、まだ自分の魅力がわかってないのよ」

「……」

「私はちゃんとわかってる……だてに歳とってないし」

「……」

「歳とって、こんなおばさんになっちゃったけど……」

また無邪気に笑っている。

「智子さんは、おばさんじゃありません」

啓太は、怒ったように言った。

「もう充分おばさんよ」

「違います！」

啓太は、ムキになっていた。

「そんなに怒らなくても.....でもうれしいわ」

「すみません.....」

「いいのよ。もうだれもそんなふうに言ってくれないし」

「.....」

「私は、そんな啓太くん好きよ」

「.....」

「私、見ちゃったんだ」

「何を.....ですか？」

「啓太くんが.....ひとりでしてるところ」

そう言って、意味ありげに笑っている。

「ひとりで？」

「昨日、ベッドの上で.....してたでしょう？」

（見られたんだ！）

「二階の窓から、偶然だけど.....」

「.....」

「カーテン開いてたから.....」

「.....」

「いいのよ。男の子だったらみんなしてるでしょう？」

「.....」

「だれのことを考えてるの？」

「.....」

「エッチな本とか見てるの？ それともアダルトビデオ？」

智子は、啓太の顔を覗き込むようにしている。

(ええい、この際だ。言っちゃえ！)

啓太は決心して答えた。

「あの.....」

「.....」

「智子さん.....」

啓太は、小さな声を震わせながら言った。

「智子さんって.....」

智子の声が途切れ、しばらくして、また言った。

「私？」

啓太は、ゆっくりうなづいてみせた。

「あたしのこと想像しながら？ 大人をからかっちゃだめよ」

「違います！ からかってなんか.....」

啓太は、今度は声を大きくして言った。

「すみません……」

「啓太くんが謝ることないのよ」

「でも……」

「そこが啓太くんのいいところでもあるのよね」

「……」

「びっくりしたけど……ちょっとうれしい……かな？」

智子は怒るふうでもなく、にこにこ笑っていた。

「で、私をどんなふうにするの？」

「どんなふうって……その……」

「怒らないから、言ってみて」

「あの……胸触ったり……それから……」

「それから？」

「その……あそこを……」

智子は、まるで他人事のような反応を示した。

「それで、最後はどうするの？」

「それは……」

「出すんでしょう？」

「.....はい.....智子さんの中に.....いっぱい.....」

「ふう〜ん」

「ごめんなさい」

「またあ。謝ることなんかないってば」

「.....」

「じゃあ、今も私と.....したい？」

「.....」

「私の裸を見たい？」

「.....はい.....」

啓太は、とんでもないことをやってしまったと思った。

よりによって、隣の智子さんとこんな話を.....。

啓太は腹を決めた。

「お、おっ、教えてほしいです.....」

「え？」

「お.....女の身体を、ぼっ、ぼ、ぼくに教えて.....ぼくを、男にしてください！」

ついにやってしまった。とんでもない言葉が口から飛び出してしまった。昂奮とも羞恥ともつかない複雑な感情に啓太の体が震えていた。

「.....啓太くん」

智子は目を丸くさせて啓太を見ていた。

「僕.....ずっと前から智子さんが好きで.....だから.....ぼくの最初の女性になって欲しくて...
...」

緊張と昂奮で顔を真っ赤にさせながら、啓太は勇気をふりしぼって頭を下げた。

「うふ、いいわよ」

「え？」

啓太が頭をあげた。

「こんなおばさんでよければ教えてあげるわ」

「智子さんはおばさんなんかじゃないです」

「くすっ、馬鹿ねえ.....キスして」

智子がそっと瞼を閉じて顎をあげた。

(やった。これから童貞を捨てるんだ.....)

待ちに待ったことがついに始まる。

そう思うと、啓太の心臓が漠々と高鳴った。

光沢のあるピンクのルージュに彩られた智子の薄い唇に唇を重ねた。

開いた唇の隙間から智子の舌が入ってきた。智子に舌を舐められ、肉棒がずきんと疼いた。

唇を重ねたまま、智子をベッドへ押し倒した。唇が離れ、鼻でしていた呼吸が大きな口へ

変わり、どっと息が漏れる。智子が瞼を薄く開いた。

「はあ、はあ、啓太くん、激しすぎ……息ができないよお……」

「はあ、はあ、はあ。ごっ、ごめん……」

啓太はそう謝って、もう一度唇を重ねた。

「うっ、ううん」

智子が呻いた。

唇を突き出し柔らかい唇の間に舌を入れると、すかさず智子の舌が絡んできた。

(これが、大人のキスカ……………)

キスがこんなにも気持ちいいものだとは思ってもよらなかった。口内を這う舌に啓太はうっとりした。

そっと唇を離すと、混ざり合った透明の唾液が糸をひき、プツンと切れた。智子の顔は興奮からか、ピンク色に染まっていた。

(あっ、ああっ、智子さん……いやらしい)

智子の妖艶な姿に太い陰茎がピクピクと震えた。

たまらずに、智子の胸に顔を埋めた。大人の女の甘い香りがした。甘い匂いを鼻腔で吸い込んだ。

ブラウス越しに膨らむ乳房に目が止まった。

「脱がしていい？」

「いいよ、啓太くんの好きにして……」

「うん……」

早速、智子のブラウスのボタンに手をかけた。上から順に両手を使って外していく。が、他人の服を脱がすのも初めてのことで、うまく外せなかった。

焦って額に汗が滲んできた。

「慌てないで……」

「うん……」

そう応えたものの、意識はボタンを外すことに集中していた。

「ふうっ……」

なんとか、見えるところのボタンを全て外した。あとはスカートに隠されたところだけになった。

(どうしよう?)

啓太はブラウスをスカートから引っこ抜けばよいのか、スカートを取ってから最後のボタンを外したらよいのか迷った。

「ふふっ、どうしたの？」

「うっ、うん……あのさあ……いやっ、なんでもないよ」

智子にこの先をどうしたらよいか聞こうと思ったが止めた。

(どっちだっでいいや)

啓太は意を決し、ブラウスの裾をスカートから引っ張りあげ、最後のボタンを外し、前を開い

た。

白いブラジャーに包み込まれた乳房が露になった。

ブラジャーで寄せられた深い谷間がいやらしかった。

(すっ、すげえ.....)

啓太は手を伸ばしてブラの上の乳房に手を被せた。

「だっ、だめだよ。まだ、だめっ。ちゃんとシャツを脱がしてから」

乳房に触れた手を智子は優しく払いのけた。

啓太は早く直接乳房に触ってみたいとの気持ちを堪えながら、ブラウスを脱がし床に落とし

た。

「そっ、そうよ.....次はスカートをとって.....」

そう言って智子はマットに背をつけた。

「う、うん」

スカートの腰にあるボタンを外した。つづいて、フックを外し、ファスナーを下げ、ウェスト部に

両手をかけると、智子が腰を浮かした。

そのお陰で思ったより楽にスカートを脱がすことができた。

(あっ、ああっ、すげえ！)

ブラジャーと同色の白いパンティから薄っすらと黒々とした陰毛が透けて見えた。乳房より、

ずっと、淫らなところが薄布一枚の向こう側にあるのだ。

肉棒は極限まで力を漲らせ、激しく疼いていた。

「うふっ、啓太くん、とっても、エッチな顔してる」

「だって、エッチなことしているんだし……」

「ははっ、そうね。でも、そんなふうに見つめられると、恥ずかしい……」

そう言って頬をピンク色に染めた智子に啓太はドキッとした。

さっきまで大人の顔をしていたと思ったら、今度は少女のように変わった。その変化にドキマギした。

「智子さん……ブラジャー外すよ」

「いいよ……」

智子の背中に両手を回し、ブラジャーのホックを探り当てた。指の感覚を頼りに指を動かして外そうとしたが、なかなか外れなかった。

「親指と人差し指で紐を摘んでずらすのよ……」

智子の助言通りに指をずらすと、パッと紐が緩み、深い乳房の谷間が広がって滑らかな曲線になった。ブラジャーからはみ出た乳房の肉が揺れていた。

「そう、ブラとって……」

「うっ、うん」

華奢な肩からストラップをずらし、腕からブラジャーを抜いた。

想像してたより、ずっと豊かに熟れて膨らんだ智子の乳房が目飛び込んできた。白い豊

満な乳房の頂点に焦げ茶色の乳首がツツと尖っていた。

(ああ、すごい.....)

啓太は目の前で揺れている桃のような智子の乳房を見つめた。パンツの中の肉棒がピクツと跳ね上がった。

触りたくてたまらないのだが、緊張と極度の興奮で手が震えて動かなかった。

「啓太くん.....触っても.....いいのよ.....」

智子が啓太の震える手を取って乳房へ導いた。

(ああっ)

乳房に触れると尖った乳首が揺れた。

「ねえ.....揉んで.....」

啓太は頷いて五本の指をゆっくり乳房に押し込んだ。膨らみが歪み、乳首が押し上げられた。ゴム鞠より柔らかくマシュマロより硬い感触だった。

(これが女のオツパイなんだ.....)

手のひらを乳首にあてがうと、智子が「あっ.....」と短く呻いた。

(智子さんって、乳首感じるんだ.....)

あの智子が、今、自分の手によって感じている。喜びと共に自信が漲ってきた。手の震えもいつの間にか止まっていた。

啓太は智子の右の乳首を摘みながら、左の乳首を手のひらで擦った。

「あぁっ、上手.....啓太くん.....あぁぁっ、いいっ.....」

智子は淫らに女体をくねらせ、甘い声をあげた。そんな智子の姿に、啓太の股間にぎんつと力が入った。

(うわぁ、すげえっ.....感じてるんだ！)

乳首だけで智子がこんなに喘ぐとは思ってしなかった。

乳首を捏ねるたびに、智子は喉を露にし、髪の毛を振り乱した。体をくねらせ、乳房を大きく揺らした。

啓太は乳首に顔を寄せた。智子の甘い匂いが鼻腔を刺激した。

舌を伸ばし、乳首を舐めると、甘い味がした。

右手で左の乳首を摘み、左右に動かしながら、舌で右の乳首を転がした。

「あぁっ、気持ちいいっ.....もっと、舐めてえ.....」

せつなそうな智子の声が啓太の頭上で響いた。

乳首から乳輪まで舐めまくった。乳首が濡れていやらしく光った。

乳首を舐めながら、乳房を揉みしだいた。

「あぁっ、上手、上手よぉっ.....ほっ、ほんとに、童貞.....？」

部屋の中に鳴り響く智子の甘い喘ぎ声に刺激され、啓太の情欲の炎は大きくなった。

乳首から唇を離し、智子を見つめた。

「あん、やめちゃ、だめえっ、もっと、もっと、激しくしてっ！」

高ぶった声を出した智子の乳房に激しくしゃぶりついた。そして、乳房をぐにやぐにやに変形させ、乳首をもぎとらんばかりに強烈に吸引した。

「ああっ、すごいっ！　すごいっ！」

智子が眉をひそめ歓喜の声をあげた。

(おっぱいだけで、こんなに反応するなんて！　じゃあ、おまんこはもっと感じるんだ)

そんなことを思ったとき、智子の手が右腕を掴んだ。

そして、「こっちも、触って……」と掠れた声をだし、腕を下半身に導いていった。

指先がパンティに触れた。布越しに陰毛を感じた。もっと下に導かれると、パンティがビッシヨリ濡れていた。

(すげえ、おまんこ、グシヨグシヨだ)

「触って……」

濡れたところに人差し指と中指をグイッと押し込んだ。

「あっ……」

智子が短い喘ぎを漏らし、腰を震わせた。

(あああ……智子さんのおまんこが、見たい……)

堪らずに啓太は身体を起こして、智子の股間を覗きこんだ。濡れたパンティの中心には智子の淫裂が薄っすらと浮かんでいた。

啓太は唾液を飲み込み、パンティの縁に手をかけた。すると、智子は、スカートの時と同じ

ように腰を浮かした。啓太はそのままパンティを一気に下ろし、足首から抜いた。

むっとする熱気とともに女の淫臭が立ち昇り、啓太の鼻腔を刺激した。

肌に張り付いた黒々とした陰毛が目飛び込んだ。だが、その下に伸びる膣肉がよく見えなかった。

啓太が、軽く開かれた太ももを大きく左右に開くと、黒ずんだ皺くちゃの二枚のヒダに挟まれた智子の恥部が見えた。

「ああっ、これが女のあれなんだ！　すごいつ.....」

啓太は、夢にまで見た女性器を生まれてはじめて見て、生の女の性器の迫力に圧倒された。

「もう、そんなにじっと見ないでよ.....恥ずかしいなあ.....」

智子が頬を赤くして股を閉じてしまった。

「智子さん、もっと、よく見せてよ.....」

啓太は智子の閉じられた膝を持ち上げ、左右に押し開いて、脚をMの形にした。再び、智子の濡れた女性器が露になった。

膣は透明な粘液で淫靡に濡れ輝いていた。グロテスクとか、気味が悪いというよりも、興奮の方が何倍も勝っていた。女性器に興奮するのは男の本能だった。

(なんてイヤラシイんだ)

「智子さん.....すごく濡れているよ.....」

「そっ、そうよ.....女は感じると濡れてくるの」

智子がそう言ったとき、膣口から一筋の愛液が漏れ出て、肛門に向かってトロリと流れおちた。

「い、いやんっ！」

「すっ、すげえっ.....これが、おまんこなんだね。智子さんのおまんこなんだ」

「ばっか、そんなこと言わないの.....」

智子は頬を赤に染め、再び腿を閉じようとした。

「だめだよっ、もっと、よく見せてよ」

「.....恥ずかしいわ.....」

すっと智子が脚の力を抜いた。

「うわぁ！　ねえ、触ってもいい？」

「いいよ、優しくしてね.....」

啓太は顔き、粘液で照り輝くところにおそろおそろ手を伸ばした。人差し指と中指が膣に触れると智子の腰がピクッと動いた。

割れ目の下から上へすっとなぞった。

「あんっ！」と智子が短く呻いた。

指を伸ばし柔らかい肉の間にゆっくりと滑りこませた。第二関節が隠れたが、まだ奥深そうだった。更に指を進め、根元まで完全に挿入したが、まだ奥には届きそうになかった。

この穴はどこまで深いんだろうと思いながら、啓太は指を動かした。壁にあたったので、そのまま指の腹でなぞってみると智子が喘いだ。

智子を見ると、虚ろな瞳をしていた。

「智子さんのおまんこ、すごく、温かくて、気持ちいい.....」

「ばっ、ばっ、そんなことお、ああっ」

指を動かすと智子は急に激しく喘ぎ出した。

「智子さん.....気持ちいいの？」

「いいっ.....いいのっ、感じる.....すごく.....あっ、ああっ」

「クリトリスとどっちが感じるの？」

「あっ、うっ.....そっ、そんなこと、あっ.....ううっ.....」

「どうしたの？」

智子は喋ることができないほど感じていた。

初めて見る女の感じる姿、美貌を歪める智子に啓太の股間の疼きは最高潮に達した。

もっと智子を乱れさせたいと、中指を加えた二本の指で膣の中をかきまわした。

クチュ、クチュといやらしい音が部屋中に響いた。

膣から白く濁った愛液が溢れ、泡立った。

智子は眉間に皺を寄せ、唇をかみ締めて快感にあえいでいた。

「智子さん、教えてよ。おまんことクリトリスのどっちがいいの？」

「やっ、やっ.....だめっ、そっ、そんな.....ああっ！ あっ、あっ、いつ、いつ」

憧れの智子が自分の指で快感をむさぼり、髪を振り乱し喘いでいる。

膣から溢れ出た白濁した愛液が、アナルまで汚していた。

啓太の肉棒に痙攣が走った。

どっちの方が感じるのか興味はあった、目の前の智子の痴態に、そんなことなど、どうでもよくなった。

女体をくねらし、快感に悶える智子に、啓太の性的興奮は我を失いそうになるくらい高まっていた。

(舐めてみたい！)

智子の膣からヌツと指を抜き、両手で智子の腰を抱えると、腿を持ち上げ、股間に顔を近づけた。

チーズのような匂いがする。これが生々しい女の香りか？

二本の指がすっぽり入った膣は、中まで見えるくらいパツクリと口を開いていた。

小陰唇に両手の親指をあてがい、ぐっと左右に開くと、内側がもっとよく見えた。中は綺麗なピンク色に染まっていた。

「やだあ～、啓太くん、どこ見てるのよお～」

智子が恥ずかしそうに腰をくねらせたが、啓太は両手でぐっと腰を押さえた。

割れ目の上には膨らんだ突起があった。

(これがクリトリスかな?)

「クリトリスってここ?」と訊きながら、啓太は人差し指で触れた。

「あっ、そう、そこっ」

智子がビクッと腰を振るわせた。

(ここがクリトリスなんだ.....)

「そうよ.....そこがクリトリス.....女の子の一番感じる場所よ.....」

「へえっ.....」

「クリトリスはとても敏感なの.....。強くされると痛いよ.....。だから、優しく、丁寧に扱ってね」

「うん、わかった.....こんな感じかな?」

粘液で濡れた指の腹で優しく撫でた。

「うっ.....うん、そんな感じ.....」

智子の腰がビクッと震えた。

「舐めてもいい?」

「いいわよ.....」

啓太は生唾を飲み込み、その淫穴を見つめた。そして、ゆっくり顔を近づけた。啓太の荒い鼻息で、艶のある智子の陰毛が揺らいた。

舌を差し出しクリトリスに触れた。

「あっ」

智子が小さく呻いた。その突起をペロペロと舐めた。かなり敏感であるのが、智子の反応から見てとれた。

舐めあげるたび腰を震わせ、智子は悩ましい声をあげた。

太ももが赤く染まってきて、肌の表面に鳥肌が立った。

女の匂いが強くなり、淫穴から漂い始めた。

男の情欲を膨らます香りだ。

舐めながら智子を見上げると、智子は快感に身体を震わせ、二つの乳房を大きく揺らせていた。

「あああ.....啓太くん.....」

智子は啓太の愛撫に溺れていた。啓太は肥大したクリトリスの周囲に円を描くように、丹念に舌を這わせた。

「ああっ、いいっ、気持ちいいっ！」

智子は身体を仰け反らせて悶えた。

(智子さん.....クリトリス感じるんだ.....)

艶のある陰毛が抜け、啓太の舌に張り付いた。顔をあげ、張り付いた陰毛を指で摘み、バットカバーに擦り付け、白濁した粘液で満たされた淫裂に沿って舌を這わせた。

割れ目の下から上に向かってゆっくり舌を滑らせると、智子はさらに大きな声でよがった。

白い粘液で汚れた部分が次第に透明な唾液に変わっていった。

新たな白濁した愛液が淫穴から滲み出てアナルにとろりと流れ落ちた。啓太は垂れ流れた粘液を追うように舌を這わせ、アナルの手前で止めた。白濁した粘液で穴が隠れた。

(どうしよう)

肛門を舐めることに戸惑いが生じたが、情欲の高波が行動を大胆にさせた。

智子の腰を更に持ち上げ思い切って、その白濁液を舐めとった。

「あっ、そっ、そこはダメッ！」

家の外に声が漏れてしまうのではと思うくらいに、大きな声を智子があげた。

だが、拒否の言葉とは裏腹に、智子の淫らな割れ目からは、粘液が次々にドクドクと溢れ出てきた。

啓太は親指で陰裂を左右に押し開き、強く唇を押し付け、チューチューと卑猥な音をたて溢れる粘液を吸引した。白濁した粘液は次々に流れてきた。

頭上では智子が女体をくねらせ、強く喘いでいた。

「あああっ、いいっ、いい、凄くいいっ！ そう、そこっ、感じる！ そう、もっと、激しく！ もっと、もっとおっっ！」

智子の両手で髪の毛を掻きむしった。

啓太は智子の暴れる太ももをがっしりつかみ、お尻を持ち上げ、濡れた陰裂に無我夢中でむしゃぶりついた。

「あっ、ああっ、いいっ、あっ、そこっ、そこっ、そこ、感じるっ！」

(智子さん、感じてるんだっ！、ずごく感じてるんだっ！)

啓太は智子をさらに感じさせようと、舌の動きを加速させた。

女の狭間から淫靡な臭気を含んだ熱気が立ち昇ってきた。粘液が弾け跳び、頬が汚れた。

舌に軽い痺れが走った。

「くりっ、クリトリスも.....弄ってっ.....」

悶える智子の声を聞き、啓太は舌を必死に動かしながら、親指をクリトリスに当てた。

触れるようなタッチではない。まだ童貞の啓太は、激しい舌の動きに反して優しく指を動か

すほど器用ではなかった。舌の動きにつられて強く擦った。

しかし、その激しい刺激が智子の性感を一気に頂上まで押し上げた。

「ああっ、そっ、そこっ！ それっ！ それっ、いいっ！ いくっ、いっ、いくっ、いくっ、いっちやう

っ！ ああああああっ！」

智子が身体を反り返らせて、一際高い声をあげた。そして激しく全身を痙攣させて、身体

を仰け反らせたまま固まった。

やがて、全身の筋肉が弛緩し、ゆっくりと腰が沈み、両手をマットに投げ出した。

(体験版はここまでです。本編を買っていただけると嬉しいです。よろしく願いいたしま

す。)